

「私」をつくるきっかけになったもの

六年 M・O

私たちの日常は、未知なるものとの出会いや新しい体験で溢れていると思います。普段はあまり意識していなくても、皆さんにも、自分の思いや考え方が変化するきっかけになった出来事があると思います。私にとっては、恵泉に入学してキリスト教に出会ったということが、自分が大きく変わるきっかけとなり、今の私を形作っていると思っています。

この五年間、毎年学んでいる聖書の授業、毎朝の礼拝、そして昨年度一年間信和会宗教部の部長を務めたことなど、これらは私が恵泉に入学したからこそ経験できたことです。私は今日の感話で、キリスト教との出会いを通して、私が考えるようになったことを述べたいと思います。私は今、当たり前のように、キリスト教について語ろうとしています。私自身も、また、私の家族もクリスチャンではありません。ですから、恵泉に入学するまでは聖書を見たこともなければ、讃美歌を聞いたこともありませんでした。キリスト教の知識が全くなかった私は、中学入学前の説明会で「聖書と讃美歌を入れるバッグを用意しておいてください」と言われた時、バッグの大きさも使い方も想像することができませんでした。わからないことだらけというのが、私のキリスト教に対する最初の印象でした。入学式も、思いも寄らないことの連続で、戸惑ったり衝撃を受けたりしながら、参加していたように思います。分厚い「聖書」を読んだり、聞いたこともないような歌詞や旋律の「讃美歌」を歌ったり、「黙祷」という心を鎮める時間があつたりと、何もかもが初めての体験でした。特に「黙祷」は、入学式の日にはその意味がよくわからず、隣の人の仕草を真似して、ひたすら、目をつむって手を握っていたように思います。こんな私でしたが、毎朝繰り返しているうちに徐々に慣れていき、朝礼拝があるのが当たり前と思うようになっていました。礼拝に対する違和感はいつの間にか消えていきましたが、私には常に気になることがありました。それは「お祈り」です。今では、お祈りの言葉は、基本的には「天にまします私たちのお父様」で始まり、「このお祈りを主イエス・キリストの御名によって、御前にお捧げいたします」で終わることがわかっているので、誰に対して祈っているのかわかっていますが、最初の頃は、そのことがよくわかっていませんでした。キリスト教に出会うまでの私はお祈りを存在するのかわからないもの、もっと言うなら、空

気のようなものに対して自分に都合のいいように願うことだと捉えていました。今の私は、それをなんと馬鹿げた考えなのかと思いますが、正直なところ今でも、「祈る」ことが、礼拝の中で一番わからないことです。そしておそらくこれはどんなに考えても理屈ではわからないことなのだと思います。それは礼拝が、一人ひとりが神様と心を通じて向き合う場であり、そうして繋がった、目に見えない心で会話するのがお祈りだと、思うようになったからです。ある先生が教室でおっしゃったことを思い出します。「この中には自分とキリスト教はあまり関係のないことだと考えている人もいるかもしれませんが、皆さん一人ひとりにキリスト教との扉は備わっていて、まだ自分で開けてみようという決心がつかないだけなのです。開く時がいつなのかは、それぞれですが、皆さんに等しく扉はあるということは忘れないでください」という主旨のお話でした。この話を聞いた時、私は自分がまだ開こうとする準備ができていないだけなのかと思い、私の中には、期待であったり、不安であったりと様々な気持ちが湧き出ています。このようにして私はキリスト教と出会いました。

そして私は次に、信和会宗教部と出会いました。私は昨年度、一年間宗教部部長を務めました。私が部長に立候補した理由の一つは、自分に何かしらの責任をもたせたかったということで、もう一つは、宗教部の印象を変えたかったということでした。四年生の時私は、初めて一年続けて宗教部の仕事を行いました。部の仕事には、やりがいを感じるものが多く、それを続けたいと思い、また部長になれば、責任を伴う分、もっと充実した仕事ができるかもしれないと思ったのです。実際になってみると上手くいくこともあれば、なかなか思い通りにいかないこともありましたが、特別礼拝の司会を任されると、礼拝がスムーズに進むよう気を配るようになり、おそらく部長でなかったら感じることのなかった責任感と緊張感を味わいました。特に昨年度は、東日本大震災を覚えてキリスト教学校の中高生が集まった「東京祈りの輪」の担当校であったため、その準備のために、他校の担当者とは何度も話し合ったり、現地を訪ね、直接お話を伺ったり、参加校が祈りの輪の礼拝で使うDVDを作ったり、忙しい日が続き、これが部長ということなのかと改めて痛感させられる時がありました。私は元来面倒くさがりやで、人の前に立って何かをするということは、やりたいとも、やろうとも思っていませんでしたが、部長になったことで、必然的にせざるをえなくなり、段々それに慣れてきて、いつの間にか、自分の中に考えがあれば、言わなければ気が済まないようになって、周りからも驚かれ、

自分でもこの変化にびっくりしています。もし宗教部に入って部長になっていなかったら今の私はいなかったのだろうなと思うと不思議です。

私は部長になるにあたって宗教部の印象を変えたいとも思っていました。入学した時、私は宗教部という名前を少し怖いと感じていました。そこで私は昨年度の新入生オリエンテーションで「もしかしたらみなさんの中に宗教部に対してなかなか好印象を持ってない人もいるかもしれませんが、でももし宗教部に入ったらその印象が変わると思いますよ」という挨拶をしました。この言葉が功を奏したのかどうかはわかりませんが、昨年度の一年生は無事部員となり、一生懸命活動してくれたのでうれしかったです。自分で言うのもおかしいのですが、私は見た目が、堅い雰囲気ではありません。自覚があるのに、私なぜ自分の見た目を変えようとしなかったのかというと、もっと宗教部を身近に感じてもらいたかったからです。それが正しかったのかどうかはわかりませんが、「外見だけ見たら全然部長っぽくないけど、逆にそれが良かったよ」と評価してくれる友もいて、また、先生からは「髪の色具合でやる気がわかるからいいね」と冗談交じりに声をかけていただくこともありました。これらの言葉を聞いた時私は、自分の考えを貫いて良かったのだと思いました。

これまで述べてきたことは、私にとってかけがえのない経験ですが、それに満足して終わるのではなく、私は、これを土台として次の段階に進まなければならないと思っています。言い換えればそれは、キリスト教を教育の中心に置く学校である「恵泉」で学んだことを、今後の自分の人生の中で、どのように生かしていくのかということです。今、私たちの周りでは、過激派組織 I S の問題や、地下鉄サリン事件から二十年が経って、当時は大変な社会問題であったのに、現在、オウム真理教系の信仰を持つ若者の数が増えてきていることなど、いくつも困難な問題が現実として存在しています。このような社会の中で、生きていかなければならない私たちはどうしたら良いのでしょうか。私たち人間は、ともすると、自分の考えに固執し、自己を正当化しようとし、相手の立場に立ってものを考えることができなくなってしまう弱い存在なのです。また、一つひとつの事柄をきちんと吟味せずに、その場の雰囲気や大きな流れに従って、誰かが言ったことを鵜呑みにしてしまうことがあると思います。先日、倫理の授業で、「人間とは何か」という問いかけがありました。これは私たちが生きていく上で常に考え続けなければならない問題でしょう。けれどもこの問いは、すぐに答が出るようなものではないと思います。

今私がこの問いに対して答を出すとするれば、それはまず自己を見つめることをすべきではないかということです。自己を見つめるのには、自分の心に何か問いかけるのも良いことですし、自分一人の時間を十分に取るのも良いことです。また『聖書』を開くのも一つの方法だと思います。私たちは毎年「人にしてもらいたいと思うことを人にもしなさい」という聖書箇所を暗誦します。自己を見つめる際、この言葉を思い出せば、今自分が抱えている問題に対して、性急に行動せず、思いとどまってじっくり判断することが可能になるはずですし、逆に、傍観せずに、行動を起こした方が良いと思っ直すこともできるはずです。たとえクリスチャンでなくてもこの聖句は、大切にしていすべき言葉だと思います。また、黙祷をするのも良い方法です。私は高校生になってからずっと、礼拝の最後に同じことを思いながら黙祷しています。それは別に、大したことではないのですが、その言葉を思うたびに自分という存在を自覚し、自己を見つめる一つのきっかけになっています。一人ひとりが自分にあつた自己の見つめ方を見つけ、自己と向き合いつつ、他者もまた自己という存在なのだということを認識し、他者のことを考えていくことができれば、争いを減らす一つのきっかけになると私は信じます。創立者である河井道先生の願いである世界平和に貢献できる人になるために、一人ひとりに意識の変化が起こるよう、私は自分の考えを言葉にして伝えていきたいと思っています。それが今の、資金もなく、強力なバックグラウンドも持たない高校生の私にできることだと思うからです。